

鬼師の世界

— 黒地：山下鬼瓦と白地：山下鬼瓦白地 —

高 原 隆

いよいよ『鬼師の世界』（高原 2002、2003、2004）は黒地と白地が混（交）ざる領域へと入ることになる。その様子を見ることが出来るのが、これから紹介していく山下鬼瓦である。実はすでに先例があり、すでに書いている鬼板屋、萩原製陶所がそうである。もともと土管屋であったものが、昭和40年ごろ、土管屋を廃業して、プレス製の白地屋になり、次の世代である萩原慶二、尚の兄弟がこの家業を継ぐ過程で、弟の尚が手作りの「鬼師の世界」に目覚め、黒地へと変化していつている。（高原 2008）

山下鬼瓦の場合も大枠においては萩原製陶所の場合と似ている。昭和40年にプレス製の白地屋として始まり、二代目になって手作りの鬼師になっていった鬼板屋である。初代がプレス製造を維持しながら、手作りの鬼瓦を二代目が作っているところも同じである。ただ、山下鬼瓦の場合、二代目が身に付けた鬼師の技が、現在なお修業中とはいえ、本格派の技の切れ味を持つに至っているところが特徴といえる。鬼師を先代に持たないプレス製の白地屋から手作りの鬼師になることは限りなく難しく、先行例である萩原尚が自ら実証済みである。そうした厳しい環境の中からいかに気鋭の次世代を担う鬼師が誕生していったのかをこれから物語ってみたい。

山下鬼瓦白地エピソード

まず本題に入る前にここに失敗談をエピソード

としておきたい。私はずっと対象となる鬼板屋を「山下鬼瓦」だと思っていた。ところが副題にあるように「山下鬼瓦白地」となっている。ここまではまだいいのだが、実際に原稿を書いている現在は2010年8月27日である。これまでに収集してきた資料は全て目の前においてある。その資料は1999年8月31日にさかのぼる。ほぼ11年の歳月が流れている。資料の中に「山下鬼瓦工場」というタイトルのものがあつた。何度もこの資料には目を通した。そして、よし、書き始めるかと決めた後、再度読んでまとめているとき、生年月日が抜けている事に気づき、山下鬼瓦に早速電話をした。奥さんが出られ話をするうちに、「うちの主人は山下吉範ではなく、久男ですよ」となり、さらに「私は貴美枝ではありません。美知子といいます」「満州へ行った事ありません」となり、話がどんどん食い違い始め、こちらもどぎまぎを超えてパニック状態になり、心のどこかで「そんな馬鹿な…」と嵐のようなものが巻き起こっていた。しばらく話しながら、心を落ち着けて「ほかに山下鬼瓦は無いですよねぇ」と聞くと、なんと一件ほぼ同じ名前の鬼板屋があるという。それが「山下鬼瓦工場」だった。つまり、11年前の今頃は、私自身が次々といろいろな鬼板屋に出向き、話を聞きながらフィールドワークを精力的にしていたのであつた。その結果が現在あるたくさんの資料へと繋がっていったのだが、11年の時の流れの

中で、山下鬼瓦と山下鬼瓦工場が一つに頭の中
 でなっていたのだ。「山下鬼瓦」の工場へは当
 時出向き、確かにインタビューもしたはずで、
 よく覚えているのに肝心なもの（資料）が見
 当たらないのであった。手元にあるのは「山下
 鬼瓦工場」の資料であった。第二のパニックで
 ある。あまりに資料が多くなり、どこにあるの
 か分からない。結局、あきらめて、その旨を、
 今回、中心人物になる山下敦に事情を説明し、
 「山下敦一本で行きます」と了承を取る事に決
 めた。ところがなんと、その電話を切った後、
 フッと何気なく上を見上げたところ、A4の用
 紙が束になって置かれている棚が目にとまった。
 何となく気になって立ち上がって取り上げて
 次々と見ていくと、すぐに、「山下鬼瓦白地」
 が出て来たのである。「あったー」と心の中
 で叫んでいた。すぐに電話をまた取り上げて、
 山下敦に「ありましたよー。これで書けます」
 と告げたのだ。本当に危く、違う鬼板屋同
 士を合体させて書く一歩手前まで行ったこと
 になる。資料の不備が逆に幸いして救ってくれ
 たのかなと考えている。さて本題へ移る事にし
 たい。

山下鬼瓦白地

山下鬼瓦の基礎を築いた人物は山下久男で
 ある。昭和6年10月13日に生まれている。生
 家は当然のことながら鬼板屋ではない。しか
 し、粘土を扱う家であった。「かまど」（竈）と
 か、「くど」ともいうものを作る家で、煉瓦も
 作っていた。ところが終戦後しばらくすると、
 電気製品が徐々に出回るようになり、かまども
 煉瓦も台所の必需品としての役目を終えたの
 である。廃業すると久男の父は会社勤めを始
 めた。久男も同様であった。

これが他の土地ならば今の山下鬼瓦は無い
 が、高浜が生まれた土地である。ちょうど電気
 製品とかまどが入れ替わる昭和35年ごろから
 「白地屋」と呼ばれるプレス機械を導入して、

鬼瓦を作る仕事が高浜に登場する。そのことは
 一般の素人がプレス機械さえあれば鬼師にな
 る修業を経ることなしに鬼瓦が造れることを
 意味した。山下久男は 傘（ヤマキ）鬼瓦の神谷
 喜代一に会う。そして山下親子にプレス機械を
 入れて白地屋にならないかと話を持ちかけた
 のであった。もともと土で生計を立てていた親
 子なので、一般の人と異なり、会社員の方が彼
 らにとってはむしろ慣れない仕事であった。結
 果、プレス機械を一台導入してもらい事になり、
 ヤマキ鬼瓦の下請けとして、昭和40年
 (1965)に山下鬼瓦白地が誕生する。場所は山
 下鬼瓦白地が現在(平成22年)ある春日町(当
 時は池田)の地であった。そして、山下久男と
 父の明治、母の「こう」の三人で仕事を始めた
 のであった。木造平屋建ての、鶏舎の一部を改
 築した工場であった。

鶏舎の古い、物凄く古い、あの、工場だ
 か、… 工場だな。ちょっと改造して、15
 坪ぐらいのところでプレス一台。昔だから蛍
 光灯は一個だけかな。薄暗いところで始めた
 だね。その日に造ったやつは、すぐに、あ
 の、表へ置いて乾いただね。

昔はほいでで、あの、あれじゃん、今でこ
 そ、表に干さんで乾燥でみなやつちゃうけ
 ど、わて、表に天日干しして、表に干し
 ちゃ、やって来たわけじゃん。一日に作る
 個数も今と比べたら少なかったし。

一日に最初の頃なんか、あれじゃない
 の…、慣れて来て、30個ぐらいの事じゃ
 ないの。20か30。むずかしくてなかなか
 やれなかった。

教えてくれたのはヤマキの神谷喜代一で、直接
 来て、プレスの使い方を教えてくれたという。
 そして、ほぼ時を同じくして、高浜に白地屋が
 あちこち誕生し始めたのである。昭和40年は

東京オリンピックの年であり、この頃に鬼師の世界が急激に変貌し始めたのである。それまで、プロの修練を経た鬼師だけが作ることができた鬼瓦が一般の素人でもプレス機械さえあれば造れるようになっていったのである。

白地屋さん、俺の頃からほいでで、一気に増えてきたじゃないの。昔からの鬼屋さんは10軒か15軒じゃなかったのかな。ほういうとこへ、勤めとった人ら等が独立して。ヤマキ鬼瓦の、教えてもらった親父さんも鬼金さんってとこへ習いに行つて、自分で独立してやられただけなもん。

もちろん急速に増えたのには理由があり、わざわざ職を替えてやるだけの採算が取れたのである。

毎月の要る費用が少なかったというのか、わりかし、そんな、あの、難儀せんでも、わりかし楽に来ただけだね。けっこう、

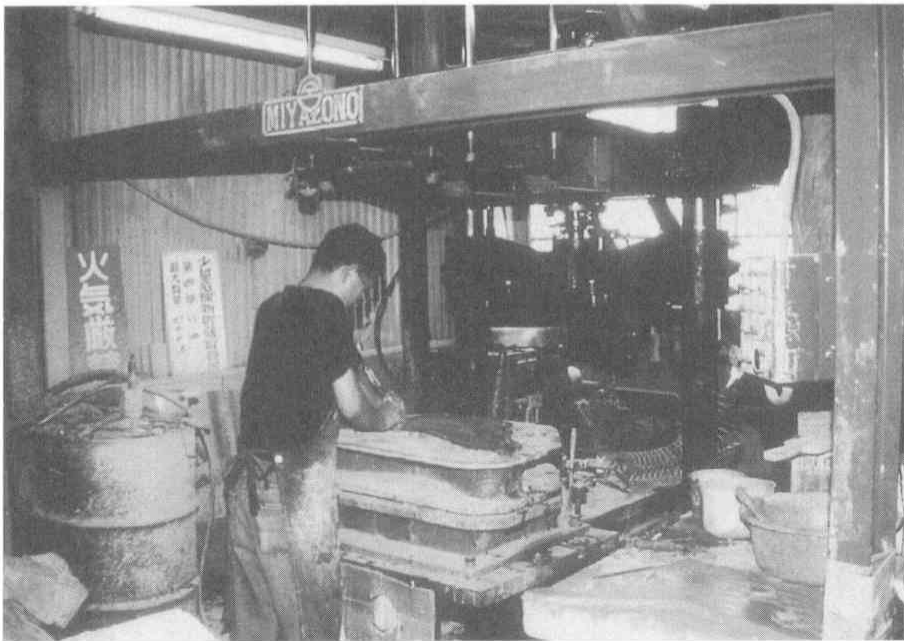
あの、他の業種から比べると、けっこう、率が良かったじゃないかな。多分。

ほりゃ、(昭和)48年ぐらいに、あの、今住んどる家を造つただけど、一年ぐらいたちゃあ、元が取れちゃうぐらいの。

作る片っ端からみんな売れてっちゃうだもん。

結局、ほうやって今までは石膏型とか手で作つとった品物が機械化しても、値段がおんなじぐらいの値段で売れてっちゃうわけ。一日に10個作るのが、機械でやると50から70てえと、もうかるわけじゃん。(第1図参照)

このような流れで山下鬼瓦白地は順調に経営の基盤を築いていった。一方、昭和44年には久男が結婚をし、山下家に美知子が新しい戦力として加わっている。昭和23年7月2日生



第1図

プレス機械で鬼瓦を製造中の山下久男(田戸工場 1999年8月31日)

まれである。土いじりなどとは全く無縁の家系の出で、本人も会社員をしていた。この二人の間に山下敦が長男として生まれているのだが、誰か器用な人はいなかったのかと美知子に聞いてみた。理由は、最初に話を聞いた久男からはそうした事は出なかったからである。

器用な人っていう私の父親かねえ。自慢じゃないんですけど、あの昔、デンソー行つとったときに、あの、鉄筋の家、鉄筋の家をねえ、あの、作った人なんですよ。だから、なかなか、その、一本気で、まあ、頑固でね。私の父親がね。

まあ、器用貧乏っていうのかしらね。暇があると何か自分で物を作ってしまうっていう。まだ健在ですねどね。まだいるんですよ。その自分で作った鉄筋の家にまだ住んでるんですけどねえ。

父親は美知子が言うようにとても器用で物つ

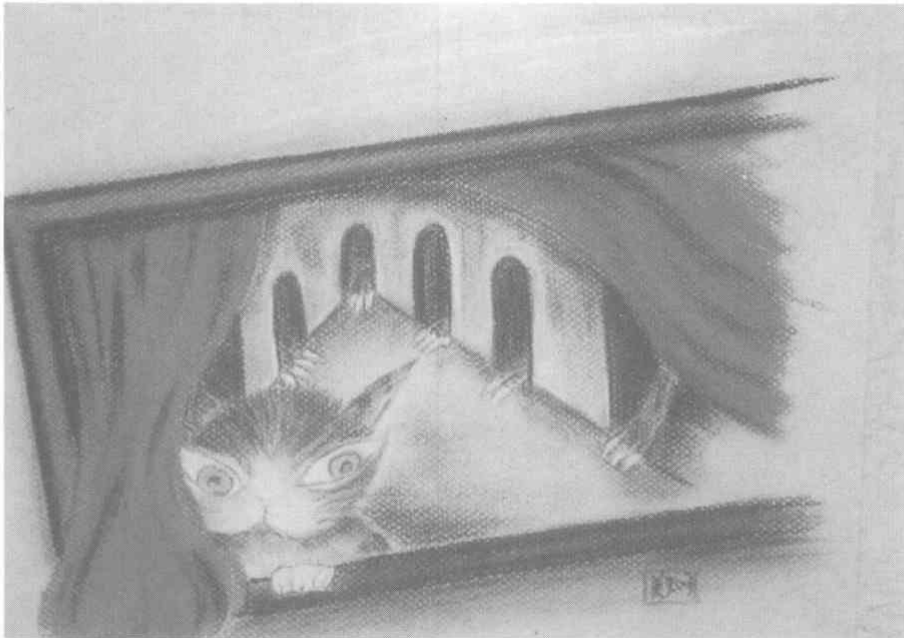
くりの好きな人間であった。ところが、美知子本人も美的な才能のある人である。ちょうどインタビューをしていた部屋には美知子が描いたという絵が何枚も飾られていた。(第2図参照)

あー、小さい頃にねえ、特別(才能が)あったとは思えないですけどねえ。でも、落書きは好きなほうでして…。

でも、まあ、(今は)絵を趣味で描いてるんですけどね。うーんとねえ、パステルとかねえ。あと、水彩とかねえ。下手ですけど、趣味で。

母親の美知子は自分自身が物づくりをする感覚を知っているせいか、美知子の絵と一緒に飾ってあった息子、敦の鬼瓦を見ながらさらに言葉を継ぐのであった。

鬼作るでも、やっぱり人それぞれ、これ、



第2図

「待ちぼうけ」山下美知子 作

性格が出るんですよ。こうやって見るとね。

だからいつもやっぱり謙虚な気持ちで、やっぱり鬼を作ってほしいなあと思うんですよ。

そして次のように敦が作った鬼を評価していた。(第3図参照)

意外と真面目なのかね。これ、私が言うと可笑しいですけど。この一、昔の職人さん気質がちょっとあるような気がするんですけど。どうでしょうか、見て…。

山下鬼瓦

田戸にあった山下鬼瓦白地の工場を訪れたのは平成11年(1999)8月31日の事である。この時、初めて山下敦に出会った。昭和45年

(1970)9月17日生まれ茶髪のヤンキーな感じの29歳にまさにならんとする頃であった。その斜に構えた身体からフツフツとした情熱・情念のようなものが溢れていた。ビックリしたのは、敦が作った鬼を見てからであった。三州の鬼とは明らかに違うシャープな感じがする鬼であった。一目見て、「この子は出来る」と思った。それが最初の出会^{あはれ}いである。当時すでに鬼師としての自覚と才能を顕していた敦であったが、十代の頃は想像することができないほど、意欲が無く、無自覚で、まして鬼瓦なんかには関心なども示さない人間だった。敦はそのころのことを次のように話してくれた。(第4図参照)

鬼瓦、プレスで造る鬼屋の長男ですか、息子ですか…。ちっちゃい頃から鬼瓦に囲まれて育った。でもこういう業界に入るまでは何の興味も無いっていうか、ただの鬼瓦



第3図

山下美知子 山下鬼瓦白地事務室(1999年8月31日)



第4図

鬼面瓦を持つ山下敦(1999年8月31日)

屋さんだ…、何の興味の無くて…。

自由気ままに育っていた敦は高校に入学したものの学業に身が入らず16歳で高校を辞めている。困ったのは敦の親であった。父の久男はこの事件に関して語ってくれた。

「俺、学校いやだ」というから、ほれじゃあ、この道（鬼師の世界）に入って技術を身に付けておけばやってけると思ってあれした（鬼板屋へ入れた）じゃないの。

その頃、山下鬼瓦白地は幸いにも経営が順調に伸びていた。つまり敦がプレス職人として働かずには後を継ぐという道も十分にあった。ところが久男は息子をなんと「鬼師」にさせる決意をしたのである。敦にとっては後の人生を決定した大転機であった。

やっぱり、プレスというのはすぐやれるじゃんね。誰でも。一番もとになるのは技術じゃんね。一番もとになるのは…。

あの、どんな仕事が、あの、舞い込んできても、「ああ、ようございます。すぐ作ります」って、ほういうふうだと、まだ今、現在だってけっこう忙しくやってけるじゃんね。技術を身につけておけば、食いつぶれが無いということじゃないの。ある程度そうやって、出来ん中で、プライドもあるし、ほんなとこじゃないかな。プレスは一週間もあれば出来るじゃんね。

方向の定まらないぶらぶらした敦を鬼師への道へと最初に導いたのは父、久男であった。目の前で話を聞いていた母親の美知子も応じるかのように当時のことを話してくれた。

まあ、学歴どうのこうのっていうよりもねえ、あの一、先どうやって行くのかしらっ

て思ったんですよ。

で、あの一、鬼の修業に行きますでしょう。子供、本当にそのまま給料なしでね。あの、行くわけですよ。でも、最初、あの、自転車乗って、あの一、往復するんですけどね、家と。私がここで（田戸工場）働いて帰っていくわけですよ。5時になると帰るんですよ。5時になると途中で息子の自転車で帰るあれが見えるんですよ。そうすると、あの、後姿見て、もう本当に、あの、「何とかがんばってほしいな」っていう、そんな気持ちだけ…。でも、最初本当に、この一、背中の後姿、あれはもう忘れられないのね。

このように敦は両親に導かれ、見守られながら、鬼師への世界へ旅立ったことがわかる。しかし、本人は全く事の重大さがわかっていなかった。しかし、敦が高校を16歳で辞め、両親によってすぐに鬼師の元へと送られたことは敦にとって決定的な意味を持つことになった。このことは敦が事実上、ほぼ中学校卒で鬼師の門を敲いた事を意味する。小学校卒業から中学校卒業あたりの十代で鬼師の世界に入ることの重要性は私自身が沢山の鬼師から話を聞く中で何度も耳にし、実際にその違いを鬼師自身と彼らが作る鬼瓦を見て確認してきた事である。それはちょうど外国語を学ぶ年齢が早いほど良く、十代を過ぎて始めると学ぶ事はできてもその言葉に母国語のような自然な滑らかさが宿らず、反対にぎこちない言葉になると限りなく似ている現象である。単なる知識のレベルにとどまらず、本人さえもうまく説明できない身体知のレベルへと移行してしまう。この境界の内側に入るか否かが自然な滑らかさをものに出来るかを決定的なものにする。

ところが敦の鬼師への道のりは全く順調ではなかった。まず敦本人自身が鬼瓦に対する興

味が無く、「鬼師になりたい」という強い動機がまったく欠けていたのである。最初に久男に連れて行かれた先が(株)丸市であった。なぜ丸市になったかといえば、実はその頃、山下鬼瓦白地では工場でプレス用に使う金型の原型を丸市に注文していたからであった。

丸市さん、家紋屋さんがあるでしょ。もう今、ほとんど手作りの鬼瓦はやってないんだけど。そこに三ヶ月間。もう今亡くなって死んじゃったんですけど、神谷正男さんがそこにみえて、その人の下で三ヶ月間ですか…。ま、ほいで三ヶ月たったときに、ま、自分は若くて、何というか、「こいつはやる気が無い」みたいに取られたのかわからないですけど、ある日、突然、「お前、来んでもいいや」って言われたんですよ。

敦はこの件については自分の非を認めている。全くやる気が敦にはなかったのだ。

毎日通ってないですけど、遊んでばっかで。

しかし、そのやる気の無い敦ではあったが、不思議と丸市で何をしたかはしっかりと覚えていた。

一番、初めて行った時、柄振台^{えぶりだい}。字入りの。あれをひたすら、あの、初めて、金^{かな}べら持って磨きました。

さらに敦は本人にとって最も重要な体験を語ってくれた。

ほいで、そんな時、丸市さんの社長…。あ、あつとね、今の、加藤元彦さんかな…。あの人の方が後ろから、こうやって持ってくれて、「こうやってやるんだぞ」って。

あれがですね、意外と大きかったような…。

ほいで、まあ、見よう見真似で、磨いて。

敦は鬼師になる処女体験を語っているのである。そしてその体験は興味とかやる気とかを通り越して、敦の心に強烈に焼き付けられている事がわかる。ほんのちょっとした手取り足取り風の体験だったとはいえ、次のように語られた。

手取り…。うーん。一瞬だけっすよ。

あと何やったかな…。影盛。型起こしの。起して磨いてシビを彫る。彫ってましたね。教えてもらいながら。あんなもん彫れるわけないんですけど。

それぐらいしか…。あと、ほとんど行っていないっすね。そうすると、(笑い) 何日おったんかな…。三ヶ月もおらんかったかな。(笑い)

ほいで、「来んでもいいよ」ってふうで、お払い箱っすよね。それが始まりっすよ。

加藤元彦から一瞬の手習いを受けた後は、見よう見真似の世界に入る。そのときの手本となったのが神谷正男である。

石膏で影盛でも、粘土詰めて、ほいで取るだとか、ああいうのは習ったかもわからんすね。

神谷さんの奥さんがそんな時に一緒に…。(仕事場で) 三人ぐらい並んで…。えらい狭いところで…。

このように敦は自分自身の鬼師としての原風景をはっきりと覚えている。ところが、一方

で、敦の友達と遊んでばかりいて、仕事はほとんどやらないに等しかったのであった。文字通り、髪を金髪に染めた遊びに興じるお兄ちゃん風の人間だった。「お払い箱」になってしばらくぶらぶらしていた敦が父、久男に連れられて次に行った鬼板屋が山本鬼瓦だった。(高原2005)しかし山本鬼瓦では手作りの修業はほとんどさせてもらえなかったという。

当時は、バブルじゃないっすか。ほすと、自分一番若いじゃないすか。要は、雑用ばっかすよ。

雑用ばっかすね。窯積み、窯出し、粘土荒地出し、トラック積み。もうそんな毎日。ほいで、もうほとんど手作りさせてもらってないっす。二年間。

わずか3ヶ月いた丸市では手作りの修業をすぐにさせてもらったのと比べると、山本鬼瓦で敦が置かれた環境是最悪であった。雑用に追われていた。しかし、それでも、仕事の合間に、敦は鬼瓦を作っていた。すごい事だと思う。疲れて何もしなくなってもおかしくない状況であろう。

ほいで、ある程度は作らせてもらった。作るっていても型で作った経ノ巻とか…。

ほいで、その頃も相変わらず仕事する気なんか…。鬼師になりたいなんて思ってもないもんすから。

雑用に追われながら、仕事に身が入らない敦は、鬼師になろうという気持ちさえ持っていなかったのである。会社へ行く事さえもサボって遊びにうつつを抜かしていた。ところが遊びから戻り、雑用をする合間に敦は鬼瓦を作っていた。全体に仕事に興味を持たないながらも、鬼

瓦を作るときは何処か意識のモードが切り替わっていたように見える。同じ職場にいた事実上の親方に当たる職人の山本種次からいつしか声を掛けられるようになる。その当時は敦は種次に対して恐れ多くて直接名前を呼んだ事はなく、「すみません」とかかって話しかけていたという。

種^{たね}じいさんが、じいさんが、割りに褒めてくれて。そうっすね、「仕事綺麗にやる」だとか…。

まあ、厳しかったけど、ほんで、「お前は素質がある」って言ってくれたんですよ。それまで一言も言ってくれたことがないんですよ。

褒めてくれて、そりゃ、可愛がってもらいましたね。

何か作ったときに見取るんすよ、毎回。そりゃ、今考えるととてもじゃあないが、採算合わんような。

時間かけて、ずっと磨いて。ほりゃ、まあ、誰も綺麗になるわぐらいの。

見取ってくれて。「ああ、綺麗だな」。山本さん(山本種次)も、種次さんも、綺麗な仕事をする人だったもんすから。もう、「この子、割りに綺麗にやるな」っていうふうで、割に目掛けてくれるようになって。

普通、職人は自分の仕事だけに集中して他人の面倒は見ないものである。まして、敦はもっぱら雑用ばかりさせられており、種次に預けられた弟子でもない。その職人がまだ駆け出しの敦を褒めて可愛がったのであった。敦は当時、髪を金色に染めた遊び人風のちゃらちゃらしたお兄さんであった。そういった敦の風貌にもか

かわらず、敦が作る鬼に何かを見取ったとしか言いようが無い。さらに何と種次だけでなく、下の一階にいた別の仕事場の職人、杉浦義照からも褒められている。こうしたことは職人が人を外見ではなく、腕で判断する事を告げているといえよう。

下に義照さん、今でもおるんですけど。あの人もメチャクチャ偏屈者すよ。そうなんすけど、自分割りに話してもらってたんすね。

そうなんすよ。「おーい、ずってくれ」って言われたとき、下降りてって、「よっこいしょ」ってやって…。

一回ですな。あの人、足音なしによって来るんすよ。二階で、こうやって。なんかビン付影盛かなんかの。石膏型作りのやつを。磨いて、こう置いといたんすよ。二つぐらいっすね。

ほしたら、音もなしに、こうやって見取って…、「この雲の芯の入れ方、こいつはいいな」って。「こいつはあかんあ」って。

(義照がコメントを) 言ったらですね、隣の種次さんがですね、ダーってやって来て、「おい、俺の弟子に何教えとるだ」みたいに喧嘩になっちゃって、ほいで、こっちに飛んで、「下いっちまえ」みたいな…。

何と山本鬼瓦の手作りの実力者、山本種次と杉浦義照、この二人の職人から敦は褒められ、可愛がられているのだ。敦が作った鬼瓦は数は知れていたと思われる。この事の意味するものは大きい。敦に手作りの才能があることを彼ら二人は見切ったのだ。しかし、当の本人はまだ目覚めておらず、仕事を合いも変わらずサボり続け、二年たつと山本鬼瓦をやめている。いった

ん家に戻り、山下鬼瓦白地のプレスを手伝いながら、手作り鬼瓦も作っていた。しかし、まだ鬼瓦の技が未熟で、うまく行かない事に気づき、再度山本鬼瓦へ戻っている。この時は一年しか続かず、自ら山本鬼瓦をやめている。修業への意欲・意志がまだほとんど無く、逆に遊びの欲求、なまけ心などに振り回されていたのである。そういった敦に義照は時折声を掛けたという。

自分もおとなしかったもんすから、休憩のときでも、ずっと下向いとったし。今みたいにこんなにしやべるあれでも無く…。

種次との揉め事以来、義照からは鬼そのものの指導はなくなっていた。それでも義照はいろいろと敦に話しかけたという。

屋根ののつとるやつを見て、「あの鬼はええなあ」とか、「あの盆栽はいいぞ」とか。「いいな」って言われるとそれがいいなって思っちゃうじゃないっすか。まあ、単純っす。(笑い) はい。

一方の種次は鬼瓦作りの指導を敦に対してしていた。

重たいものを台から降ろしてあげると、こうやって見とると、「ここはこうなつとるといいぞ」って。

つまり敦の敵は他でもない自分自身であった。関心が遊びの方にもつばら向いていたのだ。それでも遊び心を忘れて鬼瓦を作るときの敦は別人になった。同じ鬼板屋のタイプが全く違う二人の職人から目を掛けられたことがそのことを証明している。腕のある職人から認められることほど力強いものはほかに無い。そして種次と義照が敦の心に鬼瓦への興味を導いたのである。それは、この自分でも何か「出来る」

といった感覚であろう。さらに敦は鬼師の原風景のようなものを語っている。そして、それは事実、山下鬼瓦の仕事場で時々現在でも見せる敦の独特な姿なのである。

仕事（雑用）をするのは嫌だけど、ああ、でも、（鬼瓦を作るのは）好きでも、…、ないけど…。

種次さんとか、昔、見とって、「かっこいいな」っと思ったし…。「憧れ」みたいなもんはあったけど。あのう、種次さん、ここ（台）足乗っけて、当時。もう死んじゃっておらんけど。

タバコくわえながら、こうやって磨いて、「ああ、かっこいいな」って。種次さんおらん時に、僕も真似して…。

そういう単純な事がやっぱ必要なすよ。形からっすね。

敦は腕のいい職人になる極意をここで語っている。また、敦の師だった山本種次は想像以上に敦に影響を及ぼしていることになる。「見て覚える」のが職人の世界であるが、単なる技術だけではない事がここから伝わってくる。対象となる職人の仕事場でのさまざまな、この場合の職人はもちろん鬼師であるが、動きそのものが「職人」という全体的な雛形ひながたになるのだ。この場合の職人はもちろん鬼師である。つまり、いかに同じ仕事場で一緒に仕事をする事が重要であるかをとてもうまく表わしている話である。敦の中に「鬼師」の原型ができたのだ。山本鬼瓦の三年間のエッセンスである。十代のしなやかな心を持った時代がこうした環境にいかに適しているかという事もわかる。敦は雑用の仕事を一方で嫌いながら、遊びにふけていたその心に、「鬼師の世界」がやっと宿ったといえよう。

敦が山本鬼瓦を逃げるように出たのは敦が21歳ごろの事であった。平成13年（1991）であり、その頃日本はバブル経済がはじけ、大騒ぎをしていた時代である。敦は山本鬼瓦を去ってからは以後、他の鬼板屋へ入ることはなかった。まだ21歳前後の歳なので父親の久男は心配して、敦をカネコ鬼瓦へ連れて行っている。ところが山本鬼瓦から敦の勤務態度のあまりの悪いことが風評としてすでにあちこちへと流れており、カネコ鬼瓦では受け入れを断られている。しかし、カネコ鬼瓦の兼子武雄は敦を半ば受け入れを許可してもいた。

「うちは使ってあげられんけど、わからない事があつたら、いつでも来てくれれば教えるよ」って。親父さん（武雄）が言ってくれたんすよ。それから、あのう、…それから、うちでちよつと作るようになって。

武雄が敦をこのような形で支えてくれた事は敦にとって強い新たな師匠を得た事を意味する。この頃はバブル経済の余韻がまだ瓦業界には十分残っており、山下鬼瓦白地は景気が良かったのである。敦は田戸工場たので久男から頼まれた金型の原型などを作っていた。そのほかにもプレスプレスの仕事を手伝ったり、配達をしたりし始めた。手作りで作った原型はカネコ鬼瓦の武雄に見てもらいながら鬼瓦の技術を磨いていっていた。しかし、まだ、まだ遊び癖はおさまらず、山本鬼瓦で働いていた頃以上に遊んだり、怠けて休んだりしていたのだった。

（山本鬼瓦へ）いっとったときも仕事してないわけなもんすから、うち帰って来たら余計に仕事なんかしないっすよ。（笑い）遊んでばっかすよ。ホントひどいもんでしたよ。

肝心の鬼瓦も趣味で手作りをする程度だった。まして鬼瓦の注文などは無い。あるのは久男か

らの原型の依頼だけであった。

「経ノ巻作ってみたいな」みたい。そつすと、カネコさんとこ行って、「図面ってどういうふうに描いたらいいすか」みたい。そしたら、「これあるから、使ってみん」ってもらって。まあ、そんなとこつか。

敦は25歳頃まで山下鬼瓦白地で久男の仕事を手伝いながらも、山本鬼瓦へ行っていた以上に遊びまわっていた事になる。そして、鬼瓦の修業は遅々たるものだった。

なんせ、あんま作ってなかったすよ。ほとんど作ってないすね。普通その頃になってくると、22, 3, 4, 5ぐらいになってくると、真面目にやってる子はよっぽど作ってますけど。数えるぐらいしか作ったことないすね。

ただ敦にとって良かった事はカネコ鬼瓦とその間も付き合い合っていたことである。また、父親の久男が辛抱強く敦を経済的に支え、そして、鬼師の道から逸れないように工場を使う金型の原型を敦に作らせていたことが敦の鬼師の技術を育てる大きな要因になっている。つまり鬼瓦製作から離れるという長期にわたる空白期間がない。

ちょこちょこ、なんか、金型の原型、大将(久男)が「いやあ、やってみんか」ってやって。

今では考えられんくらいの時間もかかるし、形も悪いし、ようあんなんで、金型にしちゃったなあってやつがいくつもあるんだけど。まあ、やってましたね。

でも、基本、遊んでましたよ、ずっと…。

山本鬼瓦の時代とは形態は変わったがカネコ鬼瓦と付き合いようになって敦は第二の鬼師の理想を見る。もちろん第一の鬼師の理想は山本鬼瓦の山本種次である。

基本は仕事嫌いでした。仕事は嫌いなんですけど、カネコさんの親父に「憧れ」てみたりだとか…。「格好いいな」っていうのはありましたね。

カネコさん行っても、あつ、最初行ったときに、兼子さんの吸つとったタバコと同じやつ吸ってみたりだとか。鬼作るほうは全然あれだけど…。そうなんすよ。

山本種次、兼子武雄とあこがれる鬼師は変わっていき、敦は仕事を嫌いながらも常に心の奥底では「鬼師」に憧れていた。この憧れの眼差しをすでに十代から持っていたことは敦の現在を理解するのに重要な要因になる。表面上は不真面目な遊び好きな人間で通っていたし、周りからは不評さえもかっていた。だが心の深いところでは、本人もあまり意識しない確固とした目標が有ったことになる。その目標とは「理想とする鬼師になる」ことである。それが憧れとして時折意識に現われていた。そして折に触れ、その時点で敦が出来るところを真似ながら取り入れていたのだ。

敦が結婚した平成8年(1996)ごろ、初めて久男を通してではなく、直接に、石英という鬼屋から鬼瓦の注文が入った。理由は鬼瓦の白地組合の会合に敦が山下鬼瓦白地として出席するようになったからである。すると組合員の間に敦の素性が知られるようになり、山本鬼瓦での3年間の修業が経歴として買われたのであった。その注文は尺六寸の経ノ巻であった。敦はカネコ鬼瓦から石膏型を借りて製作に取り掛かった。ところが、白地の段階で全て割れてしまった。作っても、作っても失敗したという。その頃はいつも石膏型を取り、型から起こ

していた敦は、ある時、不思議な事に気づく。

型作って、作ると、作っても傷が出るんすよ。ある時に、なんか、静岡のブローカー屋さんから、なんか、ちっこいカエズが来たんすよ。そーすると、一品もんで作ると傷がわりになかったんすよ。

「あっかん、俺、やつぱ、石膏型起こし向いてねえなあ」って。

そっから一品もんにこだわるようになりましたね。あえて型作らんように。自分にとってよい転機でしたね。

現在では当然のことながら技術が向上して型起こししても傷は出ないようになったが、その当時は型で作るとなぜか傷が必ず出たのである。

そうすると、型作り嫌いになるじゃないっすか。一品物のほうがちょっと出来が良くなってくると。ほすと、やつぱ時間かけても、当然、食ってけるような。

傷が出んほうが気持ちいいもんで、ほいでそっちやるようになった。

そうした事が起きたのが、ちょうど結婚した頃の26, 7歳の事であった。もし、型起こしで傷がほとんど出ていなかったら、今の手作りを専門とする鬼師、山下敦は存在しなかったかもしれない。それほどの重要な転機であった。失敗体験が鬼師としての軌道をさらに高みへと押し上げたのだ。これ以降、敦は経済性、効率性を追及する石膏型起こしを主とする鬼師とは決別し、一品モノの完成度の高い手作り鬼瓦にこだわるようになる。

次なる転機はほぼ同時に静岡のブローカーからもたらされる。それまでは三州流の鬼瓦

を作ってきたのである。ところが静岡のブローカー屋は静岡流の鬼瓦を見本として持ってきたのだった。これが現在の敦の師匠に繋がる鬼秀流に似た形であった。敦はなぜかわからないが静岡流、鬼秀流の鬼瓦に魅せられてしまう。

さらに偶然は重なる。山下鬼瓦に静岡からブローカー屋がわざわざ来たということはもともと静岡方面の業者と山下鬼瓦白地の間に何らかの取引があったことを意味する。そしてまず父親の久男が静岡に行った折りに手作りの現地の鬼瓦に驚き、「鬼秀」の作である事を知る。久男はその流儀を山下鬼瓦白地の商品へ取り入れることを発案する。次は敦の出番であった。

自分も車で見に行行って写真とって。また、三河のと違う、かっこいいんですよ。なんか、何ていうのか、なんか、かっこいいんですよ。

そういうのを見て、ああ、そういう腕のいい人が作ったやつだったら、自分も負けずに同じものを。同じ物を作れたならば、まあ、自分も、まあ、腕がいいことになるなあ。ま、最初はそういう考えで、見て作ったんですよ。

何でしょうかね。好きなんでしょうかね。向こうのが。

手作りへのこだわりに加え、敦に新しい流儀への転機が重なった。三河の鬼の流儀とは異質な静岡の流儀への出会いと、それを作り出す鬼師、鬼秀の存在を知ったのである。例によって敦の「理想の鬼師」の炎が燃え盛った。実際に鬼秀に会ったのは平成10年(1998)に開催された「鬼師の会」であった。

口の立つ、なんとも、何ていうのかな、「思いが伝わってくる」っていうのか。ほんと、職人なんですよ。作務衣ってあるじゃ

ないですか。あれ着て、いつも、こう、仕事して、髪の毛長くて、かっこいいんですよ。ただの「憧れ」ですか。

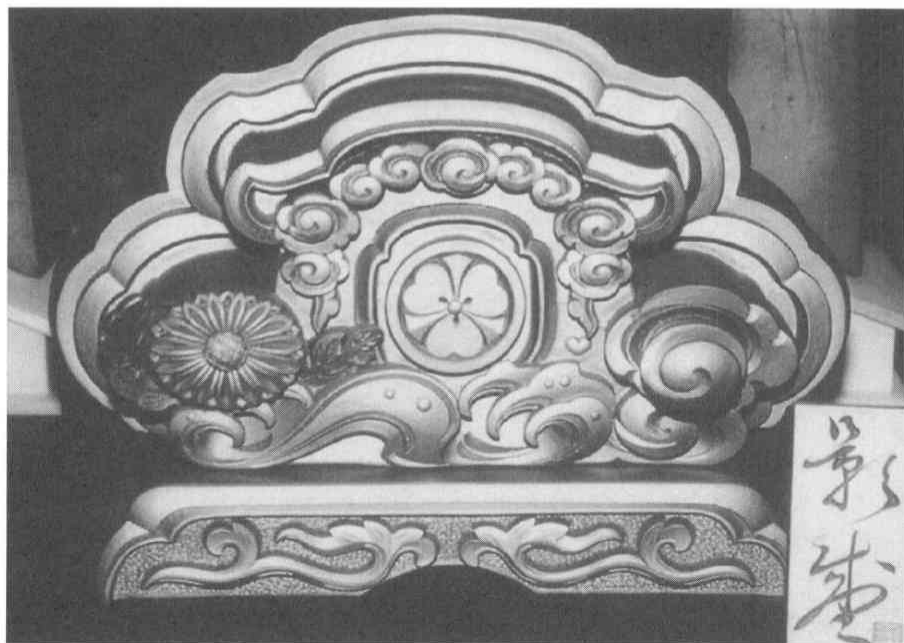
そういった流れの中にいた山下敦に平成11年(1999)8月31日に鬼師のフィールドワークを始めていた私が初めて出会ったのである。その時に見た敦の作った鬼がまさに静岡流、鬼秀流だった。(第4図参照) 当時は私はその鬼が何流かは知るはずもなかった。しかし、何と新鮮に見えたことか。素人でも見分けが付くほど流儀が違っていた。このように20代後半は遊びに夢中になっていた敦の心に「理想の鬼師」が宿り、それをはっきりと意識するようになっていた頃である。その理想の鬼師が具体的には「鬼秀」だったのである。鬼秀にあこがれていた敦がその年(1999)の鬼師の会特別展、「鬼文化江戸、東京物語展」に出品するために精魂を込めて作ったのが、鬼瓦の影盛である。(第5図参照)

一品もんでやるようになったけど、そんな注文もほとんどないし。趣味みたいなもんですよ。ほんとに趣味で。

そんときにうちの親父さんと、あっちで(田戸工場)プレスやっとなら、仕事もしてないのに給料もらって、やっとなら時に、「影盛一個作ってみようかな」って。「鬼師の会があるで」って。それで作って。

何日かかったか知らんすけど、これが始まりっすよ。

この時の鬼師の会は特別展であった。日本鬼師の会設立10周年記念を祝う展示会だった。いつもは主催者である京都府大江町と日本各地の鬼瓦の生産地で毎年交代で順番に開催されていたのが、その年は江戸展と銘打って東京で行われたのであった。全国の鬼師たちが11月14日に江戸東京博物館に集まった。私も碧南



第5図

鬼文化江戸、東京物語展「影盛」 山下敦 作

市の鬼亮さんに誘われて一緒に現地へ向かったのである。この時、静岡の袋井市から鬼秀も上京したのであった。そして敦が出品した影盛を初めて目にしたのである。

「何か似たようなもの作る若い衆がおるな」って。

つまり、敦はこの影盛をただ一人の鬼師だけに見せたかったのである。鬼秀であった。この時、私はその会場で敦と出会っている。茶髪で黒い皮のジャンパーを着て、タバコを吹かしていた。敦が投げたボールは、見事、鬼秀の手の中に受け止められていた。何と、翌年、平成12年(2000)2月に本人から直接いきなり電話が来たのであった。作品にはそれぞれ作者の名前が付いたプレートがあった。鬼秀は鬼師の会の名簿を見てメモしていた「山下敦」の電話番号を確認したのであろう。こういう事はそう有ることではない。

メチャクチャ緊張しましたよ。「おい、オニヒデさんから電話そ」って。

敦の影盛が始まりだった。鬼秀はそれを直接見て、すぐに反応したのである。ちょうど敦の師である、山本種次、杉浦義照がいきなり声を掛けてきたように。つまり江戸展において、敦は今から思い起こすと、鬼秀と真剣勝負をしたことになる。鬼師の剣はもちろん一本の金べらである。見知らぬ者の飛び込みでの手合わせを見て、鬼秀は弟子入りを許したのである。

えらい、快く迎え入れてくれて。ほいで、初日になんをやったかなあ…。柄振台と…。あと何か磨いたんすよ。

「おう、お前、綺麗な仕事するな」って。後、おっきいお寺一つやったんすよ。それが忙しくて。ほいで、足の雲を皮張って、

裏張って、表張って、雲を途中まで作って。ほいで、自信がなかったもんすから…。ほいでも、まあ、ある程度、見よう見まねで。ほいで、そこまでやって、「帰ります」って。(笑い)「あかん、ちょっと何か用事ができた」とか言って。

鬼秀はそんな敦に対して次のように言ったという。

寂しいな。まあ、いいや。また来いや。

敦は記念に図面をそのときもらって帰っている。いわば面接と実地試験にパスした事を記した合格証明書のようなものである。敦が初めて自らの意志で自ら選んだ「理想の鬼師」に向かって踏み出した一歩であった。この時、やっと父、久男から独立して歩き始めた事になる。平成11年から平成12年(1999～2000)は敦にとって激動の年だったといえる。そして奇しくもその年に敦と私は出会ったことになる。敦はこの時ちょうど虫が卵から幼虫に、幼虫から蛹に、蛹から蝶になるような変態に似た、鬼師になるある段階に達してその変態の時期にいたのである。それ以後、鬼秀とは現在に至るまで師弟の様な関係が続いている。ただ直接の師弟関係ではない。鬼秀に敦が職人として入り、修業したわけではないので、いわゆる直弟子ではない。

念願の鬼秀との交流を果たした後、しばらく静岡のブローカー屋が持ってくる仕事をいろいろこなしていた。注文が少しずつつ来始めたのであった。(第6図参照)そうした敦のもとへ決定的な仕事が舞い込む。静岡伊豆市にある有名なお寺である修善寺の鬼瓦の復元工事の仕事が来たのだ。仕事自体はカネコ鬼瓦へ来たものであったが、すでに敦はカネコ鬼瓦へは顔なじみになっており、そこに来た仕事の一部を回してもらったのであった。運もある。まずそ

の仕事は静岡からのものであった事。それから仕事が来たとき、カネコ鬼瓦はたまたまほかの仕事で忙しく、他人の手が必要だった事。敦は次のように話してくれた。

(自分は)静岡の菊が得意じゃないっすか。ちょうど修善寺(の鬼瓦)に菊があつて。「あつ、これやっていいっすか」つて。(兼子さんが)「いいよ」つて。それで持ってきて、復元したのが出来が良くて。

その仕事ぶりがとても良かったので、カネコ鬼瓦からさらに仕事を回してもらふことになったのである。

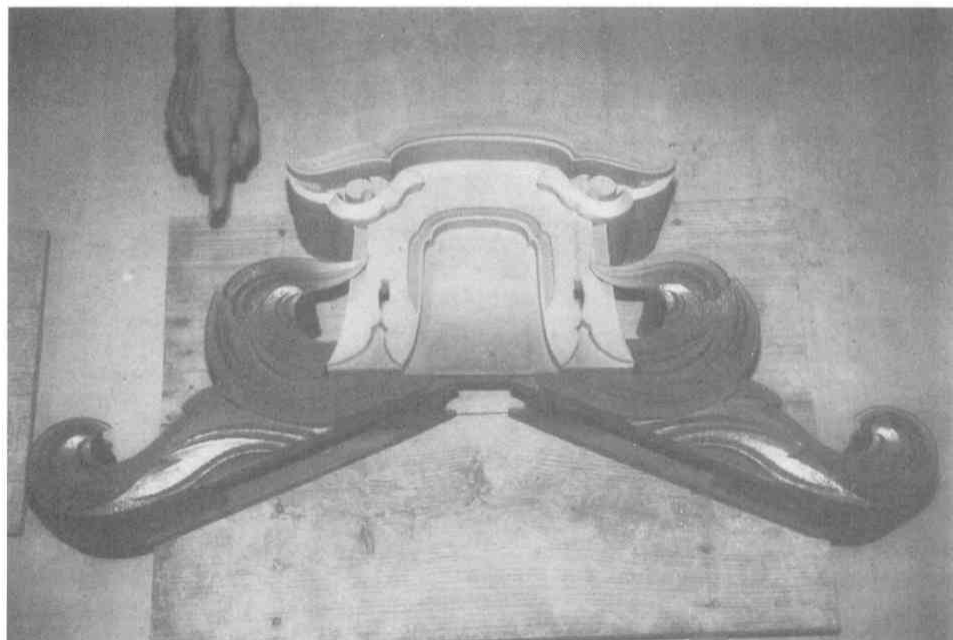
修善寺のやつは静岡の流儀で、波だとか、ああいうのは、折れちゃいそうな波が付いているんすけど。ああいうの、三州好きじゃないんすけど。その波がついとる奴を全部自分にやらせてくれて。

結果、敦の修善寺の鬼瓦が綺麗に仕上がり、出来上がりがとても良く、敦の鬼師としての腕が公に認められる大きな機会になった。仕事を頼んだカネコ鬼瓦からまず認められている。このことは次回以降また仕事が回ってくる事を意味する。さらに、復元した鬼瓦を実際に修善寺の建物にのせる屋根工事屋からも、そして全体を仕切る宮大工の棟梁にも認められることになったのである。敦が31、2歳(2001~2002)になる頃の出来事であった。

夜、修善寺完成して、また一回呼んでもらつて、宴会あつたんすけど。その大工の先生みたいな棟梁さんっすか。宮大工っすね。次ぎ行ったら、隣に屋根工事屋さん座つとつたんすけど。

「この子は上手いぞ」。

(笑い) まあ、菊水がよかつたんすよね。龍がちょっと気に入らんような感じだった



第6図

「ピン付若葉足付き」 山下敦 作 (2000年9月24日)

んすけど。龍、でも復元、けっこう出来はよかったんすけど。なんや、そんなかでも菊が良かった。

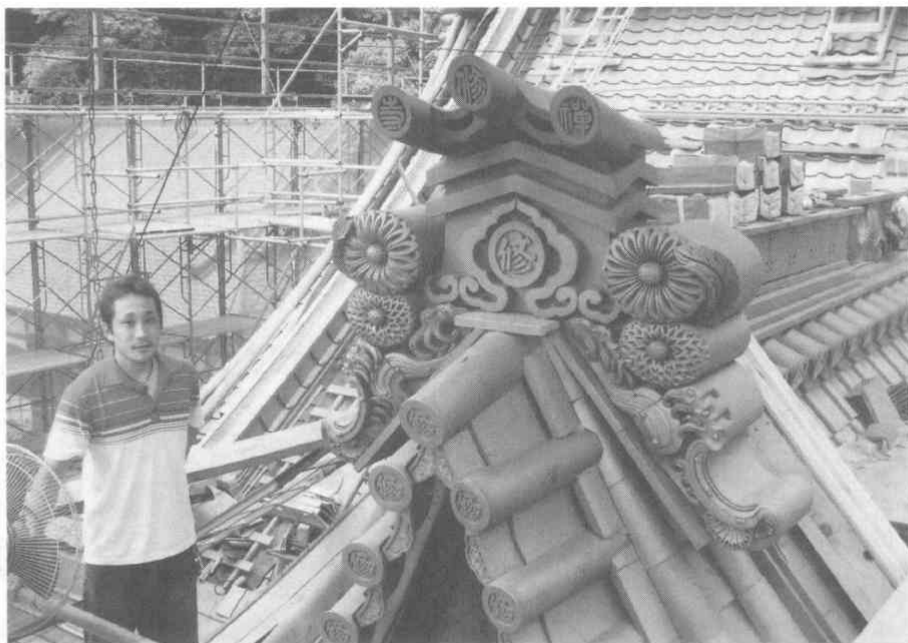
修善寺の鬼瓦復元工事は敦自身の鬼師としてのデビュー作となり、関係者の間に山下鬼瓦、山下敦の存在を知らしめる一大転機となった。鬼師としての独立記念日といえる大事な一生を左右する大仕事になったのである。修善寺以降、実際にさまざまな仕事が敦の下に来ることになる。16歳の時、久男に連れられて丸市に入り、鬼師になる修業を始めて、31歳にしてようやくある山の頂へたどり着いたのである。それにしても何という敦の変貌ぶりであろうか。宮大工の棟梁が才能を認めて話しかけるまでに敦は成長したのだ。一種の英雄が誕生する物語を髣髴させる文字通りの英雄譚である。(第7図参照)

静岡、鬼秀流儀の系統を敦は受け継いでいる

のは明白である。しかし、敦は特定の鬼屋の職人として一筋に修業してきたわけではない。ここではもう一つの鬼の流れとの接触について言及する。三州鬼板屋の中で最も古い山本吉兵衛の流れを直接に汲む鬼百との関係である。この流れが敦には伏流のように流れている。最初の交わりはかなりの過去にさかのぼる。山本鬼瓦をあまりの働きぶりの悪さに愛想を尽かされ、お払い箱になってしまったのは、敦が18歳の頃の出来事である。その敦はカネコ鬼瓦へ行く前に、鬼百の直系にあたる鬼亮のところへ父、久男に連れられて行っている。敦によると鬼亮とは次のようだったという。

「家は厳しいぞ」って言われ、「ほいじゃあやめときます」って。

そんなすげえ男だとは知らなかったし…。門前で…、そうっすね。かといってその頃にもし、とにかく入ったとするじゃないっ



第7図

「2尺経ノ巻菊水足付」 修善寺 山下敦 作

すか。続いてないっすよ。

鬼亮こと梶川亮治はこのことは良く覚えていた。私は亮治とは三州の鬼師の中で最も多く会って話をしている。そのときに何度か直接敦のことを聞いた事がある。亮治によると風評は聞いていないが、敦の金髪遊び人っぽい姿を見て自分とここで働いてもらうには合わないと思ひ、丁寧に断ったとっていた。ただそれ以降、敦の成長についてはそれなりに気には留めていて、「力量をわきまえて仕事は受けないといけなと伝えてほしい」といわれた事が何度かあった。一方、敦のほうはとても気になる存在として、鬼亮があるのは事実である。

実際、会うと無視されますけど。「おっ、嫌な野郎だな、この人は」って。(笑い)

そして、敦はその心のうちを叫ぶのである。

(笑い)絶対追い越してやるって…。(笑い)

こういった闘志は以前には全くなかったものであり、敦の変貌振りがうかがえる。また目標を具体的に持つことはとてもいいことでもある。さらに自分自身にそれなりの自信が付かないと出て来ない言葉でもある。そしてこの負けん気の強さは鬼師として重要な要素でもある。その点で言うと、敦は亮治とよく似ている。亮治は、実際、若かった頃、自分の師である父、賢一や兄の務に対して同じような感情を抱いていた。結果、亮治とは直接には交わる事はなかった。一瞬見えたただけである。ところが亮治の師匠であった兄、梶川務と不思議な縁で繋がっている。務から見ると一番若い弟子となる。そのいきさつを述べたい。

梶川務が晩年になって務の取引先であった(株)白鳳瓦の専務(当時)が務の後継者を探していた。務には残念ながら直系の後継者がいなかった。それ故、優れた鬼師である務の後継

者を見つけることは取引先の白鳳瓦にとって急務の事であった。回りに回ってきた先が敦だった。平成15年(2003)頃の出来事である。

(白鳳さんが)きて、ほいで、鬼面と、なんか経ノ巻で、注文をバーンってくれて。自分…、出来ると思つとつたんすよ。あの頃。

あの人(白鳳)、「まだ出来てないのか、まだ出来てないのか」って、催促がひどくて…。

ほいで、自分も全然技法がなかったんすよ。ほーしたら、作ったのは良いけど、パッカーン、パッカーン、割れちゃって、全部。

ほいで、まあ、「こんな人の仕事は絶対やらんぞ」ぐらいの…。自分も思ったし、向こうも「こんなとこ、絶対(注文を)出さんぞ」ぐらい。

白鳳との仕事は失敗に終わったが、その仕事で敦を梶川務に引き合わせる縁になったのであった。敦は碧南市の川端にある務の仕事場へ行くようになる。

図面もらって、ほいで、家で作りました。ほいで、そのときに経ノ巻だとか、ああいうやつわからん事があつたら、務さんとこ行ってちょっと聞いたり、話もさせて…。もう、ほんと、ちょっと話させてもらったぐらいのもんすね。

実は務はそれからしばらくするといきなり亡くなってしまったのである。平成17年(2005)10月16日の事であった。敦と務が交わったのは一年足らずの期間にすぎない。

一応、葬式出るぐらいのあれだったんすけ

ど、自分が、その白鳳さんの仕事を大失敗しちゃったもので…。

務さんとは…なんだやあ、あー、一応、「山下君が来たね」って顔は覚えてもらえるぐらいの付き合いはしていました。

事実、務は私に「山下君という子が最近来て仕事を手伝っていてくれる」といい、「なかなか筋があるから鍛えてみたい」と話していた矢先の出来事だった。務との関係は短く、残念な事態で終わってしまったが、後に、敦は「おばさん」と呼んでいた務の家内の文子から務が使っていたタテ型の荒土出し機の板で出すタイプのものを譲り受けている。こういった話から見えてくることはまだ当時は鬼瓦を十分に作りなれておらず、これから変身を起す直前に敦はいたことになる。そうした時期に白鳳を介して敦は務と出会ったのである。務はそうした敦の非凡な才能をすぐに見切っていたことになる。腕のある職人だけがわかる何かがあるのであろう。ちょうど外国語を話す人を外見には惑わされずに、音（言葉）だけでその人が外国人かどうかを見分ける（聞き分ける）ように。

残念ながら務と敦の関係は務の突然の死をもって終わることになった。ところが務と敦の関係を取り持った白鳳との関係は途絶える事はなかった。一時、務の死とまるで同調するかのように、敦と白鳳は仕事上で絶好状態に入る。敦からすると白鳳は鬼のような催促魔となり、白鳳からすると、敦は手の遅い鬼瓦の仕上げが下手糞で、傷ばかり出す職人となり、事実破局を迎えた。しかし、その白鳳が二年ほど経って、いきなり敦の前に現れ、金型の原型を注文していったのである。二年の歳月は双方に大きな変化をもたらしていた。まず白鳳自身が変わっていた。自ら瓦を作るようになっていた。

白鳳と同様に敦も変わっていた。敦は梶川務と知り合った頃の平成14年（2003）9月頃から二年間、何と白鳳と同じように瓦を習い始めていたのである。偶然として片付けるにはあまりに不思議な出来事である。この間、二人は事実上、決裂していた。そのことを考えるとなおのこと不可思議なシンクロ現象が二人の間に起きていた事になる。

二年、土曜日半日だけ。あれも大きかったですよ。暇だったんすよ。注文もなくて。

敦は西尾市にある丸六さんという瓦屋へ手作り瓦を習いに行ったのであった。

今で言う、基本的なプレスが出る前の作り方っすね。一通り、手習いっすね。もう、これは弟子入りしたって感じの。習ったって感じっすよね。瓦の部品も、社寺もん、民家もん、あの一通り作りましたね。

二年、ほいで、そこの瓦屋さんの道具を全部引き取って、そん中で、瓦の使い方だとか、そういうのもいろいろ話も聞かせてもらって。

敦は16歳から鬼師の世界に入っただけで、まともに長期にわたって一つの鬼屋で集中して修業した経験は持っていない。敦の鬼の修業はバンクモノ的な修業で、あっちへ行き、こっちへ行きの繰り返しであった。独学とっていい。ただ唯一の例外がこの手作り瓦の修業である。二年間、毎週土曜日に直伝という形で、手作り瓦を習っている。「瓦は一から全部教えていただきました」と敦は言う。瓦を教えた師匠が金原富士男である。敦は自らの口ではっきりと、「これは自分にとって大きな転機になった」と何度となく語るのであった。それまで敦が持っていた鬼瓦に対する世界が大きく変化したためだと思われる。「屋根の鬼瓦と瓦のとり

回しが良くなった」と敦は表現している。つまり、それ以前は鬼瓦だけに注意が向いていたのが、鬼瓦と瓦の関連性に目が届くようになり、その使い勝手のよさを意識したつくりの気を配るようになったのである。

鬼は、あのう、瓦の一部だもんで、全体をやっぱ知つとらないかんってことで。ある程度、知れたっていうのが…。

一方の白鳳の変化を敦は次のように言う。

東本願寺の瓦を白鳳さん作って、自分で手で作るようになったんすよ。その白鳳さんが。ほしたら、あのう、作る人の苦労だとか、こういうの、ある程度わかってきて…。ほいで、何年か、原型、金型の、原型つすね。唐草だとか、そういうのやるようになって。

すると、白鳳は少しずつ鬼の仕事を持って来始めたのであった。敦は昔の「ぱっかん、ぱっかん」と割れた鬼の記憶」が鮮明に残っており、白鳳の仕事をいろいろな理由をつけては断っていた。ところが、敦も腕を上げて変わっていた。その変化した実態と過去の記憶のずれを埋めたのが白鳳から受ける事にした金型の原型の仕事だった。しばらくすると二人は互いの良さに遅まきながら気づく事になった。やがてなくてはならないパートナーのような形にまで発展していく。

金型どんどんやるにつれて、どんどん気が合うようになってったんすよ。

白鳳さんも腕はねえけど…、詳しいんすよ。瓦とか…。

施工に関しても詳しいし、ほいで、えらい気の利いた…、みんなが知らんようなこと

も詳しいし。ほいで、どんどんやってくなからで、たまに鬼もやるようになって…。

ほいで、一緒に、こう…、白鳳さんの場合だと、自分、型作ったら呼んで、すぐ見てもらうんすよ。

「山下君、ここはもうちょっと、ここ…」とか。ほすと、確かにいいんすよ。柔らかくていいんすよ。それを続けてって、どんどん気、合うようになって来て。

作り手と顧客との関係の変化がいかに創作に影響を及ぼすかが如実に現れている例である。関係が変化すると創作そのものに亀裂が入り、作り手と顧客の関係そのものが断絶する。しかし、作り手と顧客が自ら変わり、関係が新たになっていくと、創造的な創作が生まれるのである。粘土を媒介にするパフォーマンスの妙である。

それがどんどん気が合うようになってくると…。今、すごいっすよ。文化財級の唐草でも…、来て、自分作るじゃないすか。

値段もなし。ほいから、値段も自分の言った値段でくれるし。「職人はいじめちゃいかんよなあ」って…。ころっと人が変わっちゃって。そこからえらい付き合やすくて。

ほいで、何せ詳しいんすよ。研究熱心で。この人、たまに来ると、二時間も三時間もあの人しゃべってくんだけど。そんなかで、色んな知識的なものを聞いて…。

最初、えらい大嫌いだったんすけど。今じゃ、あのう、いろんな知識的な…。先生みたいな…、はい。

(笑い) ほいだけ変わるもんすよ。それが何かっていうと、作る苦勞をわかった。どっかで…。あの人が…。

単なる「鬼師の世界」だけに当てはまる物語りを越えて大きな人生一般にも通じる人間関係の難しさと豊かさを伝える語りになっている。重要な点は白鳳の敦の作る鬼瓦に対する見立てが的確に的を射ている所にある。さらに、通常は見立てが的を射ているかの確認は限りなく難しい。鬼師の世界はそれをその場で、目の前で、手直しする事によって二人で確認できるのである。誰にでもできることではない。敦はその微妙な手直しをすぐに躊躇無しに、見立てた本人の前で、行う技量がある。その場で見立ての良し悪しが現前化するのである。これは「見る人」と「見られる人」との真剣勝負である。職人の世界、そして鬼師の世界の特徴をこれほど現しているものはない。限りなくシビアな世界である。わずかなずれやミスをも許されない世界であり、それを見抜く人が存在する。敦はそうした事実を踏まえて白鳳を見ている。互いに「見る」、「見られる」の鏡像的關係といえよう。

若葉でも、あのう、紋帳見ると、葵の紋だとか、全部、自然のもの…。なんすよ。本当は…。自然に咲いているものだとか、花だとか…。

そうすると、(白鳳さんは) わざわざ持ってきて…、花の写真持って来て…。

家紋一つでも、みんな、例えば紋を彫るとぺた一つと彫っちゃうんすよ。そうじゃなくて、もうちょい、こう…、花なら、こう、花らしく。葉っぱなら…、ちょっと硬い葉っぱなら硬く。えらい、作りとして手間なんだけど、実際出来たときに立派なんすよ。このあたりにはないっすね。それが

自分のなかで、えらい良かったですね。

敦は白鳳との出会いとそのコミュニケーションを通じて何かをつかみつつあることは確かである。似たような話を敦はしてくれた。

その前も、唐草文化財のやつ作って、ほいで、ああでもねえ、こうでもねえ…。白鳳さん、そこに座って、一緒に。

「こうっすか」って…。ミリとかほのぐらいの世界っすよ。ちょっと直して。また…、そこで直す…。

「お前もよう見られながら直すな」って言う。

直して、二人で、こう見て…。「うん、だいぶようになりましたね」って。これで一日。「検査に持ってってくるわ」って。

ほいで、ビニール囲って、滋賀県、持ってって。

一発合格。

その、一発合格って、あんましないんすよ、普通、業界。あれを、よく、「落ち」となって。

文化財検査官が見るのだという。そこはクレームが付くのが当たり前の世界である。一回や二回の手直しを命じられるのはあたり前なのである。

もう絶対つきます。つけるのが仕事ですからね。だけど、それなりのものをやっぱりこっちが持つてくと、向こうもわかるじゃないっすか。ほすと、「ああ、いいでしょう。OK」って。

白鳳こと杉浦達雄と敦は「見る」、「見られる」の絶妙の関係をとりながら、敦自らの鬼師の世界をより豊かに、より細やかに、より力強く構築してきている。白鳳もまた師といえよう。

あの人の存在は大きいっすよね。自分にとっちゃ。まあ、細かいもんが、白鳳さんの見る目に対応してあげられるようになったんすよ。(笑い)

山下敦が山下鬼瓦の工場を現在ある春日町の家に移ったのは平成18年(2006)二月の事である。古い木造の漆喰の壁を持つ工場である。敦がことのほか気に入っている場所である。一般の人にとっては好いとはいえないような場所で、通りから引込んだ陽があまり射さないどちらかといえば薄暗い仕事場である。ところがそこが良いと敦は自画自賛する。そこは鬼師でないと本当の良さがわからない世界である。

ここ、壁あるじゃないですか。これ、今じゃなかなかない、えらい上手な感じらしいっすよ。やっぱ、ここは作るに適した…、良い仕事場っすよ。メチャクチャ良いっすよ。

敦は仕事場の壁が漆喰で厚く塗り込められており、その湿度の調整の自然な動きに驚いている。

もう良いっすね。乾燥が鉄鋼(で出来ている以前使っていた工場)に比べると、全く違いますよ。

もう、普通、そこそこ二尺ぐらいの経ノ巻になると、あの、どっかで、こてんって倒したり、ピッと来たら、埋めてやったりとか、そういう作業はなしですよ…。

全体に綺麗に乾く。

夜なべしていると、何時ぐらいかな…、10時とか…なると、パーって暑くなる時があるんすよ。

なんか吸ったり吐いたり…しますよ。呼吸するってよく言うじゃないっすか。ほすと湿度は上がってないけど、湿度があって、上がるみたい。

夏場なんかようわかるんすけど。急に、ぶわー、じとーっとして来たり。ほいで後、急に「涼しいな」ってなったり…。

これがつすね、5時に上がっちゃわからないうんすけど、夜なべすると気がつくんすよ。

そして敦は鬼師にとって決定的なことを言う。

乾燥が本当に楽になりましたね。傷が激減しました。

このことは別の言葉でいうと、手作りによる物作りには昔ながらの土壁が、特に土から生まれる瓦作りには最適で、最新の素材からなる建物がいつも良いとは言えないことを示唆している。確かに古い伝統的な日本家屋に入ると冷房をきかしていない夏でもひんやりして心地よいものである。現代式の機械で強制的に空調する建物よりも手作りの鬼瓦は自然な生きた空間を好むといえる。

この新しい(古い)仕事場に敦にとって第二の修善寺とも言える重大物件が舞い込む。平成18年(2006)8月、移って半年足らずの事であった。皇居の屋根の葺き替え工事に伴う鬼瓦復元の仕事が来たのだ。このタイミングの良さは神の成せる業わざとしか言いようがない。敦がベストの仕事場に移った時にベストの仕事が敦の力量を測るかのように現れたのだ。依頼は宮内庁である。もちろん直接の依頼ではない。ま

ずスーパーゼネコンといわれる会社間で入札があり、大林組に決まり、(株)埼玉三瓦工業(屋根工事屋)へ渡り、さらに(株)天木(瓦屋)に移り、その天木から鬼十(鬼板屋)へと仕事が出来たのだ。鬼十はその仕事を山下鬼瓦、鬼英、丸市に依頼した。仕事が大規模になるとさまざまな業者が中間に入り、適切と思われるところへ下請けに出す事がわかる。山下鬼瓦は文字通り最末端の現場なのであった。下請けの下請けのそのまた下請けといった場所が、鬼が生まれる空間なのである。鬼は中心からはるか離れた周辺で生まれる。

最初の鬼瓦の注文は一つの鬼瓦が三つのパーツに分割され、三軒の鬼屋へ注文がいった。敦は鬼の足の部分を受けたという。ところが出来上がってそれぞれを全部揃えてみると全体に良くななく作り直しになっている。その後、次の注文は敦一人にきた。前回で鬼を監督する人が要求する水準が見えたのである。検査のハードルは通常よりも高かったのだ。しかし、この試験に監督からクレームが付き、パスはしたものの、完成度において十分ではなかったのである。結果はすぐに次の注文に現れ、山下鬼瓦には注文は行かずに、別の鬼板屋へと流れたのであった。この時点で万事休すである。ところが敦は運から見放されてはいなかった。皇居の注文はいくつもの鬼板屋を回りに回って、何と敦の元へ再度戻ってきたのである。このことはどこも監督の基準を満たす事ができなかったことを意味している。そうした状況の中で監督は再度、敦に白羽の矢を立てたのである。ここに登場する監督は大林組の皇居の物件を任された人物で、松崎洋一という。山下敦は監督の事を次のように言っている。

「信仰心」みたいなものが見えてるんすよ。見る目がある…。気分的なものもあると思うんすけど、その日のつすね。

いろんな文化財見とるし、あと、いろんな美術館行って、いろんなもん研究して、…。そういう人は、パーって見ると、わかるんすよ。

敦は皇居にのっていた鬼瓦と、他の鬼板屋が今回作ったものを二つ並べて、自ら図面を描き、原型を作り、その監督に来てもらい、現物を見せたのである。

1ミリぐらいつすね。1ミリないところを、ここをピュッと取って…。「どこですか」って。目の前で直して…。

ここで、直したんすけど。「うん、いいでしょう」っていうふうで。

そっから、うちに来るようになった感じっすね。

山下敦は敗者復活戦を制したのだ。それはわずかに「1ミリない」世界の闘いだった。それを敦の仕事場で監督の目の前でやり遂げたのであった。

そうするとですね。一回失敗してるじゃないですか。「絶対逃がさんぞ」っていう…。

もう、ほいで、金も考えずに、時間も考えず、メチャクチャ磨きましたね。型にしたんすよ。型にした後に、全面へら当てて、全面、一個一個彫ったように作る。

まあ、細かい…指摘を直して、ほいで、作ったら、とても印象が良くて。それからずっと作り続けたんだけど。

そこで、ちょっと手を抜くと、全然だめっすね。

つまり少しでも監督からNG (No Good) が出るとまた他の鬼板屋へ行く危険を常に抱えながら敦は綱渡りのような真剣勝負を監督としていたのだ。監督自身もうかつな物は皇居に置けないので、重責を自ら背負いながら、この仕事にふさわしい鬼師を捜し歩いていた事になる。そして敦は監督の期待に応えたのだ。また予算も皇居の物件だからといってふんだんにあるわけは無く、そこそこの値段で、その値段を超えるものを作ろうという気魄があるかどうか現実^{きぼく}に要請されてくる。敦はそれに正面から挑んだのであった。そのことを敦は次のように表現している。

コマ何ミリとかのずれはあるんですけど。全体、パンッと見て、真っ直ぐピシッと芯通って、左右ピッと来とって、なおかつ、手作り感もあって、それ以上の何かがパーンと出てる感じが出るのにえらい苦労しましたよ。

敦はさらに一言でこのことを言い直しているのがとりわけ印象的であった。

「圧倒的信仰心」っすか。

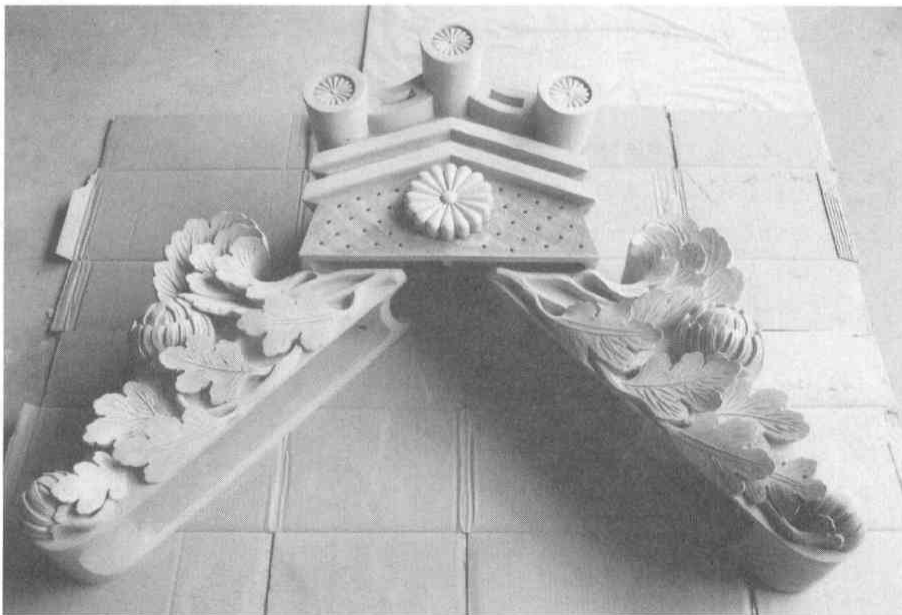
「圧倒的信仰心」で作ったものを復元するんすよ。(第8図参照)

いきなり「信仰心」などが飛び出してくるとドギマギしてしまうが、「圧倒的信仰心」について敦はわかりやすく話してくれた。言われて初めてその心が胸にスッと入って来る。

それなりの、自分、信仰心ないんですけど。当時の人になったような気持ちで…作る。

はい。「なり切り」っすか。

作った人の、当時の信仰心に負けんぐらいの。ほいで、なおかつ、要は、「もとのやつよりいい物を作るぞ」ぐらいの気持ちっ



第8図

「尺3寸獅子口菊模様足付」 山下敦

すね。なかなか腕がついてこんでいかんすけど…。

自分で言うのもなんすけど、「どうだ」ぐらいの…。(笑い)

話をよく聞くと、敦の競争相手は現在の鬼師ではなく、過去であり未来の鬼師であった。見えない鬼師を相手に腕を競っているのだ。そのときに勝負を決めるのが「圧倒的信仰心」なのだという。敦はさらに具体例を挙げて話してくれた。

東本願寺って浄土真宗でしたっけ。確か。あつこの…平瓦と全部、瓦、確か、三河地方でやったじゃないかな、当時。そんな時に「信仰心」っすよ。

お寺とかお坊さんに対する「信仰心」で一枚一枚切って、一枚一枚磨いて。一枚一枚細かい面をとって。

ほいで、今度、窯に。今の窯じゃないけど、昔のだるま窯かなんか知らんけど。穴かなんかに積んで、心込めて作るじゃないっすか。

お寺に作るもんすから、仏像があつて、建物があつて、それを守る瓦。そのぐらいの意識でみんなつくったわけだもんで…、やっぱいいんすよ。メチャクチャいいんすよ、ものが。

ところが現代はお寺の瓦を作るのでさえも、ただの仕事になってしまっていると敦は言う。

仕事。仕事っすよ。

金っすよ。

信仰心が全くない。僕が見るに。多分な

いっすよ。そういう、目に見えん差がやっぱりね、なんか、有るような気がする。

皇居の鬼瓦の仕事を体験して、敦はまた一回りも二回りも成長したように思える。もともと皇居の屋根に載っていた鬼瓦を昔作った今は亡き鬼師たちと高度なコミュニケーションを交わしながら作ったことは疑いようがない事実である。敦は皇居そのものへ行ってその現場をも実際に中に入って見て来ている。そして何かを知ったのである。敦は皇居の改修工事を終えた時に、監督の松崎洋一から黒い地肌を持つ大理石に皇室の菊の紋を彫りこんだ「平成の大改修記念品」を別れ際に「残り物だけど」っとボンと渡されている。実際に仕事場で敦から直接見せてもらったが、実にあっけないほど小さな、手のひらほどのものであった。しかし、その価値は計り知れない。事実、(株)天木や他の瓦屋さんたちは「こんなもんもらった奴は見たことがない」と口々に言う。(第9図参照)



第9図

「平成の大改修記念品」を持つ山下敦

まとめ

山下鬼瓦白地と山下鬼瓦について見てきた。昭和40年創業のプレスの鬼板屋として始まった山下鬼瓦白地は創業者が今だに健在な事もあって、初代の生き様が生き生きと浮かび上がってくるところが特徴である。二代目に当たる山下敦は山下鬼瓦白地を継ぐ人物として今に存在しても決しておかしくない。しかし、初代の山下久男の決断と導きにより、16歳にして「鬼師の世界」の門をくぐった。昭和57年の事であった。この時は敦本人はまだ全く鬼瓦に興味はなく、目覚めていないのが大きな特徴である。反対に「鬼師の世界」からすぐに弾き出される始末であった。しかし、それが山下鬼瓦の始まりでなのである。本人の自覚の有る無しに関わらず「鬼師行きのバス」に乗せられている。しかも鬼師になるのに最もいい年齢になるのを待っていたかのように。一般社会の常識からすると落ちこぼれになり、不登校生、不良少年といわれてもおかしくない敦であったが。

ところが丸市、山本鬼瓦、カネコ鬼瓦、鬼秀、さらに、鬼亮、梶川務、白鳳ときまざまな鬼板屋と関係を持ち、転々としていく人生を歩んでいる。一つの流儀にこだわらない、現代のバンクモノと言っても過言ではない。そして平成13年から14年にかけて修善寺の鬼瓦を手掛けており、山下鬼瓦として鬼師の世界にデビューを果たし、その実力を認められている。新しい鬼師の誕生である。また平成18年からは3年ほどかけて、皇居の大改修工事に山下敦が主になって関わり、鬼瓦を作っている。現在では三州の手作り鬼師の中で若手実力者の一人と言っても言い過ぎではない。山下敦がたどってきた道は一人の若者の変容の歴史である。そして、まるで導かれるかのように要所要所で重要な人物に出会っている。また大きな仕事が敦の実力を公開する場であるかのように機能しているのが特徴で

ある。それは本人も大なり小なり自覚しているようである。皇居の物件についての敦の言葉がそのことを明白に示している。(第10, 11, 12, 13 図参照)

一番運が良かったのは、要は、自分は、こういうの得意なんすよ。鬼秀さんみたいに鬼面がこんなところに、バーバー載っつたら、多分、自分じゃ勤まらんかったと思うし。

たまたま得意分野で…。

そうなんすよ。運も有りますよね。運と縁とみんなのサポートと。

まあ、やっぱ、こういうのは、自分で言っちゃああれだけど、来るべき、来るべくして、やっぱ、来る仕事みたいな。

たまに感じる事があるんすけど。

最後に敦が目指す鬼瓦について敦本人が語っている言葉をここに引用してまとめを締めくくりたい。

傷は無い方が良くから…、かつ、自分の目指すのは、形も良くて、ちゃんと瓦として機能して、ほいで、なおかつ装飾も柔らかくて、「ウオー」ってなるような。

それ、目指すんすけど、なかなか難しいっすよ。(第14 図参照)

参考文献

- 石田高子 1983年 『甕のうた』 愛知県陶器瓦組合
 駒井綱之助 1968年 『粘土瓦読本』 彰国社
 三州鬼瓦製造組合・三州鬼瓦白地製造組合 2000年 『三州鬼瓦総合カタログ2000年度版』 三州鬼瓦製造組合・三州鬼瓦白地製造組合
 杉浦茂治編 1962年 『高浜市資料(六)』 高浜市



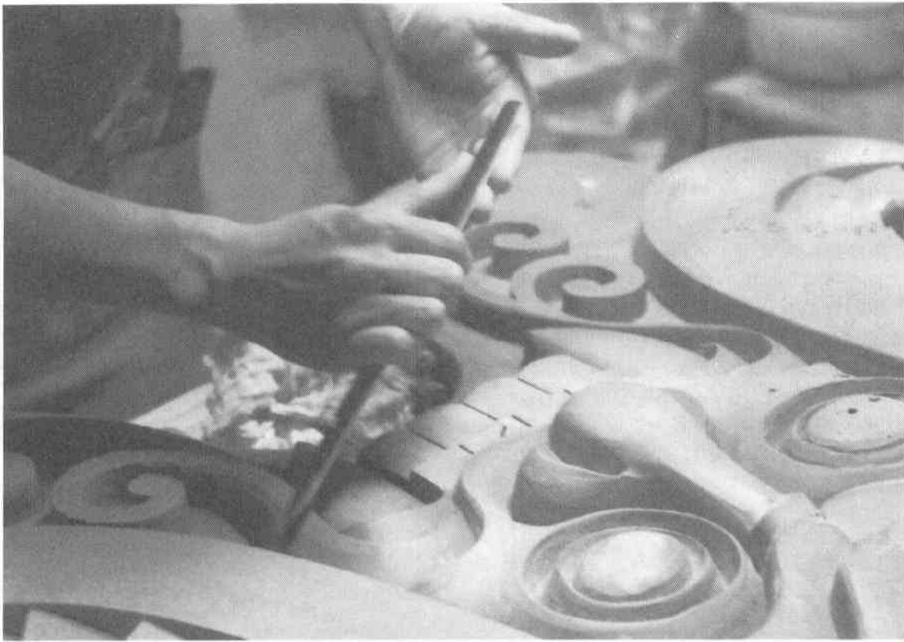
第10図

尺5寸古代鬼面前立又ぎ製作中の山下敦①



第11図

尺5寸古代鬼面前立又ぎ製作中の山下敦②



第 12 図

尺 5 寸 古代鬼面前立又ぎ製作中の山下敦③



第 13 図

尺 5 寸 古代鬼面前立又ぎ完成④ 山下敦 作

- 高浜市伝統文化伝承推進委員会編 2003年『鬼瓦をつくる～愛知県高浜市の三州瓦～』高浜市伝統文化推進実行委員会
- 高原 隆 2002年「鬼師の世界—三州鬼瓦の伝統と変遷」『文明21』第9号：227-247
- 2003年「鬼師の世界—黒地：山本吉兵衛(1)」『文明21』第10号：163-189
- 2003年「鬼師の世界—黒地：山本吉兵衛(2)」『文明21』第11号：81-132
- 2004年「鬼師の世界—黒地：神谷春義・岩月仙太郎(1)」『文明21』第12号：113-165
- 2004年「鬼師の世界—黒地：神谷春義・岩月仙太郎(2)」『文明21』第13号：155-175
- 2005年「鬼師の世界—黒地：山本鬼瓦系(1)」『文明21』第15号：188-208
- 2008年「鬼師の世界—黒地：丸市、(杉莊)、萩原製陶所(3)」『文明21』第21号：73-95



第14図

玄武の布袋 山下敦 作